



2015年12月13日発行

No.38

早稲田大学本庄高等学院通信

発行：早稲田大学本庄高等学院 発行人：吉田 茂 〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3 ☎0495-21-2400 【URL】http://www.waseda-honjo.jp

焼け野のきぎす、夜の鶴

学院長 吉田 茂

入試広報の

ための学校説明会
で必ず触れる言葉がある。それは、

「焼け野のきぎす、夜の鶴」という言葉である。

これを取り上げるのは、本学院のある俗称大久保山には、その「きぎす」、即ち雉（国鳥である）が棲息し、オスの美しい羽色を見せてくれるからだ。

赤染衛門（九五六？～一〇四一？）

の歌「身を隠す方なきものは我ならでまたは焼け野のきぎすなりけり」と詠まれる「きぎす」は、棲んでいる野に火が放たれ焼かれると、親鳥は自分の命を犠牲にしてまでも子を救おうとする、恩愛溢れる鳥である。

一方、鶴も冬の寒夜、霜や雪の冷たさから子を守るために翼を広げるといふ。小倉百人一首では儀同三司母で知られる高階貴子（？～九九六）は「夜の鶴都のうちに放たれて子を恋ひつつもなき明かすかな」と詠み、『白氏文集』新楽府の「夜鶴憶子籠中鳴」の詩句を典拠とする歌を詠んでいる。叔父道長との政争に敗れ大宰府に流された我が子藤原伊周（これちか）を憶う痛切な歌だ。このように「焼け野のきぎす、夜の鶴」という言葉は子に対する親の情愛を讀める言葉であるのだ。

世間では親による子供への虐待が取り沙汰されて久しいが、本学院の保護者の多くは、「焼け野のきぎす、夜の鶴」の言葉どおりの思いでお育てになられているのであろう。有り難い限りである。

今秋、学院において悲しくも悔しい出来事があった。子どもたちの日常を知らぬ小生によって、深い情愛で育ててこられた我が子が目の前で

痛罵されるのであるから、居たたまれぬお気持ちであつたろう。それは、子の人権を全否定されているのではなく、改善すべきことに言及するのだと頭では分かっているにも納得しがたいものであつたに違いない。たぶん、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（藤原兼輔）の歌ではないが、子への愛情故に目がくらみ、迷いの道に入ってしまうことを忌避するがゆえに、小生の言葉を冷静に受け入れられたのだと思う。

痛罵する方も辛い。心が痛む。子を持つ親であるから、ある程度は保護者のお気持ちも想像できる、だから心が痛むのだ。その重い心をもつて車に乗り込みエンジンをかけると、手紙が無理なら電話でもいい『金頼む』の一言でもいい お前の笑顔を待ちわびる おふくろに聴かせてやってくれ」（さだまさし、案山子）の歌詞が耳に入る。子の声を聞きたいのは、おふくろだけでなく、親父も聞きたいのだと独り言つ。子のためなら「惑」つても良いのではないかとも思う。自分も「獅子の子落とし」などの強い気持ちにはなれないよなあとと思う。この自分の心を押し隠して痛罵してよいのか、いや、その心で痛罵しなければならぬのだ、などという様々な思いが錯綜する。車を動かしながらさらに思う。吉田松陰の「親思ふところにまさる親心けふのおとづれ何と聞くらむ」の歌、即ち彼が命を絶たれる時の歌を痛罵された生徒たちはどのように理解するのだろうか。よ



もや理解できぬのではないか：、という懷疑心を打ち消すためにアクセルを踏み込んだ。

「新穂」するため

稲穂祭実行委員長 3年 橋爪 優祐



四月に初めての稲穂祭実行委員会を開いてから稲穂祭までの半年間、実行委員会をこなしていかねばならぬ。話すことも名前を知ることもなかったかもしれない実行委員同士が連携を取り、稲穂祭を成功へと導くために努力してきました。

今年の稲穂祭のテーマは「新穂」。今年から行われる新しい試みが「穂」をあらわして欲しい、この稲穂祭を行なうことで学院生にさらに「進歩」して欲しいという気持ちを込めて、実行委員でこのテーマを決定しました。このテーマを実現するために私たちに何が出来るのか、その課題に私たちは常に向き合っていました。

まず、今年から行

われた新しい試みについて話したいと思っています。今年から大教室に代わり稲穂ホールを使用する、食品販売を屋外でも行なうという二つの新しい試みが行われました。



ジから校舎芝生ステージグラウンドステージ、稲穂ホールが一直線に並ぶことでお客さんにもわかりやすく、様々な場所を見てもらうことが出来たと思います。屋外での食品販売はメインステージの近くで食品販売をすることで更にステージを盛り上げ、最高の環境を作り出すことが出来ました。また、今年は例年懸念される雨が降らず、快晴が続くことで更にステージは盛り上がり、屋外での食品にもたくさんのお客さんが集まってくれました。

次に、学院生が進歩するための挑戦について話したいと思います。稲穂祭では各クラスの企画や様々な部活の発表が行われます。特に三年生はこの稲穂祭で部活を引退する人も多く、高校生活最後の稲穂祭にたくさんの思いを持っている人も多いでしょう。その稲穂祭を成功へと導くために私たちは各クラスの企画や部活の発表など、たくさん準備や練習をします。



その努力によって、学院生は更に進歩することが出来るでしょう。その進歩するための舞台を作り上げたのは、他でもない学院生であることを忘れてはいけません。

次に、この稲穂祭という舞台を作り上げるために半年間活動した実行委員会について紹介したいと思います。私は今年の学院案内のパンフレットに「稲穂祭にはさまざまな人のたくさんの思いが詰まっています。」と書きました。稲穂祭は今年で三十四回目の開催を迎え、今までの三十三回の思いを残しつつ、私たちに何が出来たのか、そのことについて実行委員は向き合いました。まず、先ほど述べた屋外での食品販売では、更に厳しい衛生管理を行なうべく、食品専用のバートを設置し、稲穂祭で大きな事故が起きることがないように努めました。校内装飾については美術パートを中心に実行委員全員が夏休みや稲穂祭前の放課後に集まり、校内を華やかに飾るために努めました。完成した装飾を見て驚いてくれた学院生やお客さんの声に実行委員は耳を傾け、本当に嬉しく思っています。イベントや広報については昨年までの反省を活かして、新たな試みを取り入れることで今年の実行委員ならではのカラーを出すことが出来たと思います。様々な困難を乗り越えることで実行委員の結束はより強まり、稲穂祭が近づく頃にはまるで実行委員をやる前から知り合っていたかのように仲良くなるようになってきました。



このような様々な力に支えられたことで、今年の稲穂祭を成功へと導くことが出来ました。この稲穂祭を通して、私たちが実行委員会を含め、学院生は大きく「新穂」することが出来たのではないのでしょうか。最後に、この稲穂祭を成功へと導いてくれた学院生、先生方、事務所の方々、その他多くの関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。この稲穂祭の成功は私たちを更なる高みへ押し進めてくれると信じています。最高の稲穂祭を本日にあげよう！



高校生にとってスマホは何よりも大事で、これがなくては片時も落ち着かないというレベルから、自らの生存そのものを脅かしかねない禁断症状を呈するものまで、いずれ

れディープな依存状態は変わらない。モノは必ずしも人を幸せにしてくれるとは限らない典型がスマホであろう。うまく使えばこれほど生活を豊かにしてくれるものもないが、行き過ぎれば様々なトラブルの元凶となる。高校生にとって仲間との付き合いにラインやツイッター、メッセージングなどのSNSは常識だろうが、またこれらを巡るトラブルも深刻である。はじめの多くは今やこれらスマホ上の電脳空間で起こっている。匿名性と拡散性、即時性など既存のメディアが持たない利点を全て兼ね備えているからであろう。問題はいじめだけでは無い。試験における不正行為にもスマホは顔を出す。こっそり授業の板書も試験の告知も写真で済ます。授業中の教師も隠れ写メであつという間にツイッター上で晒しものだ。日本全国の高校で恐らく似たような事態が進行していて、現場はその対策に躍起となっている。だからそもそも学校への持ち込みを禁止している所も多々ある。だが、禁止したからといってなくなることはないだろう。それよりも生徒のそうした行為が何故よくないのか、倫理的にも法的にも教育的にもきちんと生徒に教え込む責務が学校にも家庭にも社会にもあるだろう。どこが欠けてもうまく機能しないのがこの問題の厄介なところである。思えば今の生徒は可哀そうな面もある。秋の夜の静寂さの中で、じっくり本を読みながら考えるという思春期に当たり前の行為が、友人からの絶え間ないメッセージの着信を告げる様々な音で中断され引つ掻き回される。これでは思考力は育たない。それともこれは新たな人とのつながりの必然的現象なのだろうか。

(MT)

修学旅行を 振り返って

3年生は9月27日から6日間、台湾・新台湾・中国コースに分かれて修学旅行へ行きました。

台灣修學旅行報告

3年H組 福島 友太郎

2015年度の修学旅行を一言で表すのなら「激動」だと私は思う。修学旅行実行委員長を務めることが決まった6月当初、修学旅行先の3コースの中では最も「穏便な修学旅行になるだろう」とばかり思っていたのだが、その予想は見事に打ち碎かれた。

今年は、修学旅行の全日程のうち3日間の予定が中止変更された。理由は、言うべくもなく「台風」である。今までの修学旅行でも、類を見ないほど悪天候に見舞われたケースだったらしい。国立の博物館を含む「施設」すべてが閉鎖となり、先方生の必死の対応と、ガイドの方の提案のもとスケジュールの変更がなされ、泣く泣くショッピングに行った思い出やホテルを出る時間を調節した記憶が鮮明に脳裏に残っている。淡水、台北、アイ等々中止になった行先や催し物も多くある。そんな数々の悪条件の中、私の記憶に深く残っていることは友達や班長の「気遣い」だった。

今回修学旅行中に行った班長会議は、実に5回に及んだ。毎日のように、班長同士で集まり話し合いの場を設けた。連日スケジュールの姿更・確認があったことを覚えている班長も多いだろう。特に、自由行動前日の対応は私の中でもかなり大変だった覚えがある。自由行動が可能か、という事を検討しなければならず、私自身も非常に悩むところだった。最終的には「自由行動を通常通り行こう」という最もとのスケジュールを崩さず済んだのだが、反対の意思を示してくれた班長もいた。安全面の心配もあり不満もたくさんあっただろうに、文句ひとつ言わず、融通を効かせた対応をしてくれた班長には改めて感謝したい。(本当にありがたいと思いました)私はこのような班長達の「気遣い」が暖かったからこそ、この修学旅行が無事に成功したということ、を、念を押して言いたい。そして班長以外のみな

さんは、このような班長達の努力が陰ながら修学旅行を支えていたことを知っておいてほしい。

ど)をうけても波乱万端の修学旅行だったが、私自身は全体を通して非常に充実していたと思う。小籠包をたくさん食べたり、交流相手と仲良くなれたり、台南の南国気分を味わえたり、レストランの料理はさておき、笑とても良い思い出になった。ホテルの良さも、思い出に欠かさない。部になった。思い出すたびに一日一日が非常に濃かったことに気が付くが、やはり最も思い出深いのは交流だと思う。私の交流相手は将来俳優になったというので、かなりの美男子だった。頭の良い美男子となると、非の打ちどころが全くないじゃないかと、彼と会った時は身構えていたが、予想外に優しい英語で会話してくれた。そして自分の英語で意思疎通ができることを非常にうれしく思った。通じないことも多々あったが、それでもお互いに話そうと働きかけることに、何とも表現しにくい感情が芽生えた。通じあつて良いな！と身に染みて体感した瞬間だった。

修学旅行参加者各々で思うところはそれぞれだろう。決して良い思いではかりではないとも思っ、しかし、この「無事に成功した」ということが、そ本当に大事なことのではないだろうか。日本を離れ異国で過ごした6日間、初めての海外経験という人も少なからずいたわけで、水を飲むのさえ戸惑ったという経験をした人もいるはずだ。考えているこの半分も表現できなかった私は、未熟さを突き付けられた気がした。そんな未熟さを陰ながら支えてくれた先生方、そしてガイドの方々には本当に感謝したい。また私に限ったことではないだろうが、いつも一番近くにくいてくれるだけで安心していられる友達の人にも忘れず感謝したい。(班員のみんな、支えてくれて本当にありがとう！)

新台湾コース修学旅行

3年C組 吉田 桃子

2015年9月27日、私たちは新台湾コースの生徒たちは台湾へと到着しました。元々韓国コースを修学旅行の行き先として選択していた私たちは複雑な気分ながらも、今から5泊6日を過ごす台湾という国がどのような国なのか、それぞれ期待と不安を胸に抱えていました。

空港に到着したにも関わらず、周りに友達が多いせいか、空港の標識の多くが漢字なせいか、台湾に来たという実感はそう簡単にはわきませんでした。しかしバスに乗って街並みを見渡してみると、そこは普段私たちが慣れた景色と

は全く違いました。道路にはたくさんバイクが走っていて、バイク専用の駐輪スペースが道脇にあるほどでした。他にもヒルのペランダにたくさん植木が置かれていたり、信号機のライトが五つのものがあつたりと、車窓からの光景だけでも異国を訪れているという実感が大いにわきました。

今回の修学旅行では、台北に二泊、台中に二泊、その後再び台北に二泊というスケジュールでした。台北では中正記念堂や、九份、台北一〇一などの観光スポットを訪れるに加え、各級での自主研修を行い、台中では台中一中との交流や夜市散策を行いました。

特に私は、夜市での二つの経験が忘れられません。一つは友達とフエイクタウーをしたことです。フエイクタウーとはその名の通り偽物の刺青のことで、一週間ほどで落ちてしまいます。そのときに私たち二人のコミニケーションをしてくれたお兄さんのフエイクタウーが印象的でした。彼は中国語しか話すことができません、私たちも日本語と英語しか話せず、お互い言葉で通じ合うことは不可能でした。このとき私はまさに言語の壁というものを目の前にした気分でした。しかし、終始笑顔なお兄さんと身振り手振りや片言で理解しあえたときの喜びは今でも忘れられません。この経験を通じて、私はコミニケーションとは言葉だけではなくということを知りました。

もう一つは臭豆腐を食べたことですが、その前に九份を訪れたときも感じた鼻を刺すような独特の香り、その正体は臭豆腐でした。日本の納豆のようなもので食べてみるとおいしいよとガイドの人は説明をしてくれましたが、私はどうしてもそれを買って食べてみようという気にな



はなれませんでした。しかし夜市で、その臭豆腐の試食を発売してしまいました。試食などはと、恐る恐る食べてみました。が、やはりその匂いに圧倒され、おいしく食べることはできませんでした。しかし、これもチャレンジして得た大きな収穫だったと思います。次回台湾に行く三年生にも、ぜひこの味を体験してほしいです。

台中 中との交流では当日、たくさんの生徒たちが外にでて私たちのバスを出迎えてくれました。交流相手の二人の女の子とは前もってメールでやり取りをしていたということで親密感もあり、会うのがとても楽しみでした。バスを降りて歩いていると二人の女の子が私の名前の

書いて、とて感動的でした。二人とも優しく、気さくで、お互い完全には通じ合うことができない中でも、お互い飯と一緒に食べたり、学校案内してくれたりと、ぎやかな時間を過ごすことができました。その後、活体験の時間などがありました。そのときも台一中の生徒たちは、私たちができる限り楽しい時間を過ごせるよう、大変好意的に接してくれました。私も今後他国の人と交流する機会があれば、そのような姿勢を見習いたいと強く感じた交流となりました。

ちの力でまわるということに緊張しました。慣れない土地で地下鉄に乘ったり、地図を見て相談し合いながら歩いたりするのはとても楽しかったです。私たちの班は小籠包を食べ、台湾のマングーかき氷を食べ、主に食べ歩きと買い物をしました。買い物の際には店員さんが片言の日本語で話しかけてくれ、台湾の人々の親切さに感動しました。

この修学旅行を通して私は、たくさんの人々や土地や食べ物などに出会い、同じコース、同じ班だった友達と共に一生の宝物になる思い出を築きあげることができました。私以外の新台湾コースの生徒たちもそれぞれの貴重な経験を通して、多くの新鮮さに触れ合うことができました！と思います。あいに台湾にも見舞われ、多くの旅程変更を免れない修学旅行となりました！また、このたびに全力を尽くしてくださいました旅行会社の皆様、諸先生方、その他修学旅行に関わり、私たちに有意義な経験を積む機会を与えてくださった多くの皆様へ感謝をしたいと思います。



「ありがとう。謝謝。」

3年D組 星名 優作

私はドキドキしていた。決して初めて乗るわけではないが、やはりこんな大きな鉄の塊が飛ぶんなんてにわかには信じ難い。そんな私の不安を横目に飛行機は……飛んだ。

申し遅れました。この度、修学旅行北京コースの
実行委員長を務めさせていただきました星名
優作です。今日は名前だけでも覚えて帰って頂
けたら嬉しいです。

やうに、他學府に行くとこになつてゐる「ク
ク」の音もする。期間中の6日間は、毎日がキ
ャドキですね。飛行機を待つかのやうにワクワド
キドキです。何とも言えないホコリっぽさがあ
る。息を吐くことがためらわれ、息をするの
が深呼吸することがためらわれ、思ふほどで
なかつた。中国へ行くと決めたときからある程度
の覚悟はしているつもりでした。しかしさすがに中
國私達の予想をはるかに上回つてくれました。
この状況下での6日間はさすがに厳しいかな……
と不安がよぎりましたが、人間の体とはすごいな
もので、もの数時間で中國の大氣に馴染んでし
まい、むしろ帰る頃には中國の空氣が恋しくな
つてしまつてゐました。

先地を觀て回りました。しかし天氣はあいにくの雨、霧の中の万里の長城は何と言葉にしたらいいかわかりません。どれだれ登つて進むは先は霧の下を振り返つて見ても霧。左右を見回しても霧。もはや万里の長城というより、天空の城でした。

ラビユタを離れた後、私たちは天安門広場へ向かい戻りました。あの、ニュースなどでよく見られる天安門広場です。テレビで見たことのある天安門広場は、生で見たらいつも以上に天安門広場でした。

他にも私達は数日にわたって様々な名所を回りました。古い時代の兵隊や農耕具などが展示されていた故宮博物館。歴史にとってはたまらない博物館となっております。園内いたるところに人がいて、景山公園中国人のパフォーマンスを感じました。そしてやはり、なんと言葉でも話せる人でした。中国は雑技団観なくしては語れないのでしよう。約一時間 私達は同じ人間であることを忘れながら、雑技団のパフォーマンスを鑑賞しました。まさに感無量：「言葉にできない」といふ言葉くらいしか言葉にできない。私達は様々な場所を巡りましたが、とにかく皆さんに声をかけ

大きくして叫びたいのは、ニュースやネットで報道されている中国だけに縛られるな！ということです。気にしていた大気汚染も、慣れればそれほど気にならなかつたし、明るく熱い中国人には、日本人にはない素敵な魅力がありました。

この北京トクもまもなく終盤に差し掛かっていますが、北京での思い出は観光だけではありません。北大附中との交流が、アツかつた…。はじめは、日本語でさえ危ういのにな英語でコミュニケーションなんて取れるか不安でした。しかし、割と自分の気持ちには伝わりまして。言葉の壁は、自分が勝手に高く積み上げてしまっていただけで、実際はそんなに高くないことを学びました。両校の出し物がこれまたアツかつた…。自分も出物のひとつ「ジャパニーズカルチャーコメディ」の準備に携わったのですが、交流前日の夜中まで過酷な準備が続く、非常に苦労しました。それでもみんなが笑顔になったときの光景は感動的で、今でも毎晩夢に出てきます。

この場をお借りしてもう一つ言っておきたいのが、班列自由行動についてです。この物凄く楽しい企画、一歩間違えると自分達にとって、他の班列のメンバーにとっても苦しい思いになるというところをお伝えしたい。修学旅行準備期間の時から先生や添乗員さんの話はしっかりと、入念にこれまでも深々というくらい聞きましょ。日本にいるうちに班列行動のイメージトレーニングをしておくとベストです。それくらい慎重に臨んでください。そうすればきっと物凄く良い思い出が出来ることでしょう。

迷っているなら、北京コースをお薦めします。
最後にありますか？もし修学旅行のコースに
現在絶賛中国ホームシック中の私が言うのだから、間違いありません。
ご静読、ありがとうございます。

Super Science High School事業報告 (2015年4月～11月)

※主なプログラムのみ掲載しています。単発の講義・講演等は紙面の都合上割愛します。

1. 本庄市立藤田小学校との連携活動

2012年度より河川研究班メンバーが藤田小の5・6年生の総合学習の年間講師(年8回程度)を務めています。今年の河川研究班メンバーは、3A溝口滉太・山川冴子、3H佐藤裕友・尾林舞香・高山千恵、2A荻野結衣、2C畑蘭乃、2D垣鍔結衣、2H久保田怜奈・玉手萌衣・高崎航平、1A杵掛理美、1H小泉悠登です。

6月10日・10月28日に小山川・元小山川での合同河川調査を実施しました。また、以下のような授業を実施(予定も含む)しました。

- ・5月13日「目の不思議 ～錯視について～」
- ・6月3日「河川調査予備学習
～川の生物、バックテストの使い方～」
- ・6月17日「河川調査からわかったこと」
- ・9月9日「チリメンモンスターを探そう! ～チリメンジャコから、住んでいた海の環境を想像しよう!～」
- ・11月4日「プレゼンの達人になろう! (その1)」「顕微鏡でプランクトンを観察しよう!」
- ・11月7日 藤っ子祭「葉っぱにも口があるよ! ～SUMP法による気孔の観察と森林保護～」
- ・11月11日「河川調査からわかったこと」
- ・2月3日「お茶会体験」(本庄学院茶道部による)
- ・2月17日「プレゼンの達人になろう! (その2)」
～市民シンポジウムでの発表に向けて～



2. 輪講「これがサイエンスだ!」

2013年度に開始した本校教員による自前の輪講です。今年度は11月現在、以下の講義を行いました。

- ・第1回目 4月22日「暗号・人工知能・誤り訂正符号 ―現代社会を支える数学の秘密―」、齋藤翔太先生
- ・第2回目 5月29日「つまようじを投げて円周率 π を求めよう!」、成瀬政光先生
- ・第3回目 10月6日「トボロジーの世界」、齋藤真理沙先生
- ・第4回目 11月6日「幽霊粒子をつかまえろ! ―速報! ノーベル物理学賞解説―」、峰真如先生
- ・第5回目 11月11日「感染症ってなんだ?」―速報! ノーベル医学生理学賞解説―、矢野健治郎先生

3. Singapore National Junior Collegeとの交流

①Waseda-NJC Exchange Programme(テレビ会議7月9日、シンガポール研修7月16日～23日)

共同研究ミーティングの他、イスタナ(大統領官邸)見学、動物園見学等を行いました。参加者は3C川口穂夏、3G勝又絵里佳、3H高山千恵、2A金子奈央、2C丸山紋加、2E宮崎まゆか、2G白戸なな・飛知和志帆・吉田鈴奈、です。



②NJC-Waseda Exchange Programme(10月26日～11月1日)

NJC生徒9名(女子6名男子3名)教員2名が本庄学院を訪問しました。共同研究ミーティングの他、学院生の宿泊を伴っての都内研修(みらい館、早稲田大学櫛原研究室訪問、軽井沢研修(鬼押し出し、火山博物館、軽井沢セミナーハウス、群馬自然史博物館)、ヤマキ醸造での醤油作りワークショップ、授業参加、茶道部による歓迎お茶会、長壽研修を行いました。ホストファミリーを引受けくださった、2C丸山紋加、2G白戸なな・吉田鈴奈・飛知和志

帆、2H山崎晴貴、1C清水理愛・花田知優、1H鎌田賢知さんのご家庭にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

4. 小笠原研修(8月25日～30日)

3H尾林舞香・市川なつみ、2B中川慎一郎、1B石原みらい・田中尚史、1H市川実花・吉野舞・川澄優介・島田藍が参加しました。母島こども科学教室では今まで最高の33人の子供・保護者・旅行者の方に参加していただきました。今年は初めての試みとして、母島沖港から南端南崎までを縦走しました。植生や地形上のポイントの説明の他、陸生マイマイの分布について専門家からお話を伺うことができました。この他、海洋生物観察、夜行動物・夜光タケ観察、南島におけるワークショップを行いました。母島観光協会のご配慮によりアウトリガーカヌーや小笠原太鼓も体験することができ、密度の高い研修となりました。



5. 南三陸研修

この研修は2013年度より、NPO法人E-TEC様のご協力の下、震災被災地復興の様子を自分の目で見ることで、復興に何らかの形で関われる機会を作ることを目的に、実施しているものです。3A稲玉侑里子・溝口滉太、3H佐藤裕友、2A荻野結衣・光山未藍・西那巳子、2F中村綾音・吉田日菜子、2G大木恵里佳、2H久保田怜奈・高崎航平・玉手萌衣、1A杵掛理美、1H市川実花・小泉悠登が参加し、松島湾におけるマツモ再生活動参加、伊里前川河川調査等を行いました。



6. 国際的な場における研究発表

・SKYSEF2015(8月8日～11日)
SKYSEFはSSH校である静岡北高校が開催している国際高校生科学フェアです。本庄学院は連携校として参加しました。2H久保田怜奈・玉手萌衣が参加し、「Circumstances and Analysis of Occupation of the rivers in Honjo city by the Alien Shrimp」のテーマで研究発表し、審査員特別賞を獲得しました。



・KSA Science Fair 2015(8月11日～15日)
2F水越百香、2G飛知和志帆が、Korean Science Academy(KS A、釜山)で開催されたサイエンスフェアに参加し、ポスター部門賞を獲得しました。

・JSSF 2015(11月2日～6日)
JSSFはSSH校である立命館高校が主催する世界一の規模の国際高校生シンポジウムです。1H鎌田賢知・原田慧、2H山崎晴貴が参加しました。原田はNJCとの共同研究として発表しました。鎌田と山崎は立命館高校のグローバル人材育成事業として、12月に台湾を訪問します。

・Thailand-Japan Student Science Fair(12月21日～25日)
タイの科学教育振興に尽力したチュラボン王妃の60歳の誕生日を記念してタイと日本とのあいだで開催される、日本から150名、タイから300名の高校生が参加する大規模な科学フェアです。本庄学院は招待参加で、2年菊地聖・高岡美憂・鈴木瑠夏・畑蘭乃・伊藤三瑠・飛知和志帆・金子奈央が参加します。

・MWITS Science Fair 2016(1月25日～2月3日)
MWITS Science FairはMahidol Wittayanusorn School(MWITS)が毎年開催している国際高校生科学教育プログラムです。例年3名の定員ですが、今年度はMWITSの御好意により8名参加し、フェアの後学校間交流できることとなりました。

活躍するOB・OGたち

「日は落ち、また繰り返す」

早稲田大学本庄高等学院 第2期卒業生
株式会社電通 第11営業局
局長補 安部 英彦



♪弾に打たれこの身が砕け散っても
♪足は止まらないのさ、明日に食らいつけ
♪闇に飲まれ心で笑えなくなったら
♪他の進路は無い

これはKANA-BOONの「日は落ち、また繰り返す」の歌詞の一節です。苦しかろうが、思い通りにならなかろうが、とにかく、終わらなき道を行くしかない、明日は何度でも繰り返訪れる、そういう歌で、私が気に入って何かとよく聴いている曲です。

私は本庄高等学院から、そのまま早稲田大学理工学部に進み、卒業後、電通という広告会社に入社し、そこで約26年間勤務しています。学生時代より、広告を見るのが好きだったので、自分で多くの人のココロを動かす広告を創りたいと考え、広告会社に入社しました。入社後はクリエイターになり、ノンスーツ、フレックスタイム、アフター5は、東京の最先端スポットで夜な夜な様々な人と出会い、その人たちとクールな仕事をたくさんして新しい未来を創造していく、、、そんなことをイメージしていましたが、現実決してそんなに甘くはありません。その後の私の26年はまさに冒頭のKANA-BOONの歌詞の一節を地で行く状況となります。

入社の配属は縁もゆかりもない名古屋、そこから、中部支社マーケティング部門三年、中部支社メディア部門五年、中部支社営業部門4年、広告の中心の電通本社を知らず、そこから程遠い中部支社で十二年も勤務することとなります。希望していた業務と違うどころか、東京にいる家族、親友、恋人と離れ、孤独な名古屋生活、当時は自分の運命をよく恨んだものです。特にメディア部門は電通の中でも最も上下関係が厳しい体育会系の部署でクリエイティブとは縁遠い、いわば広告枠のスペースブローカーです。自分の担当しているメディア(TBS系列)に如何に売上げをたてるか?ということが自分の成績となります。同じフロアでデスクを並べている同年代の他系列メディア(例えばCX系列、NTV系列他)担当の同僚たちがいわば敵となるということが、とてもつらい職場状況をつくり出します。加えて、この仕事は何よりも経験と人間関係がモノをいいます。新入社員からの配属ではなく、他部署から転入してきて、特殊な制作法が身についていない当時の私は、取引先である放送局、会社の先輩、後輩からいようにやられました。ここでの体験は自分にとっては今となっても筆舌しがたいものです。当時はたくさんの人を恨みながら、会社をやめるか、いっそのこと死ぬか、と迷いながら、会社に通ったものです。

そんな時代から早16年がたちました。いろいろありましたが、結局、その当時、敵と言いつつ、やりあっていた輩たちが会社の中の様々な部門に散らばり、今や最も信頼できる私の人脈、情報ネットワークとなっています。とにかく、あらゆる苦難は一步一步進めば、なんとか解決するものです。そして、一つの苦難が終わり、しばらくすると、また、種類の違う大きな苦難が訪れます。それは人間であれば、もれなく、そうなのではないでしょうか。人気ドラマ「半沢直樹」も「白い巨塔」も近いことが現実の社会では普通に毎日起きています。

学院生の皆さんも、人間関係、勉強、課外活動でいろんなことがあると思いますが、それは社会に出るための大切なレッスンです。思い返せば、中学卒業したての甘えんぼ小僧だった私が親元を離れて過ごした本庄単身生活3年間は、その後の苦難を乗り越えるためのとても大事な期間であったと思います。

“比叡山に、やがて月桂冠になる雨が降る”

降り注いだ雨は比叡山に染み込み、その地層で磨かれ、天然水となり、やがては世界で活躍する日本酒「月桂冠」になります。その様子を日本を代表する広告人である秋山晶さんは広告のコピーにしました。先日、30年ぶりの稲後祭に伺わせていただいて、大久保山に磨かれて成長していく学院生の皆さんの様子を遠くから眺めていましたら、このコピーを思い出しました。

生徒達の活躍

◆ 硬式テニス部

- ＊インハイ予選(5月30日～6月1日)
シングルス 2位 木元風哉 インターハイ出場
- ＊関東大会(6月5日～8日於埼玉県)
シングルス1回戦 木元6-7(3)福田真大(慶応湘南藤沢)
- ＊インターハイ(8月1日～8日於大阪府)
シングルス1回戦 木元8-6柳沼佑哉(安積)、2回戦 木元5-8藤井颯大(同志社国際)



- ＊新人戦地区予選(9月11日～12日)
男子シングルス 優勝 木元、4位 相原賢太郎、5位 照井瑞規、8位 阿部元紀、9位 金子曜、12位 川口天麻、15位 小川航平、16位 岩満大輔、26位 津田陸希
男子ダブルス 優勝 木元・岩満、3位 相原・照井、5位 金子・阿部
女子シングルス 2位 舟橋萌、4位 伊藤三瑠
女子ダブルス 優勝 舟橋・伊藤
- ＊新人戦
男子シングルス 優勝 木元、ベスト32 相原
男子ダブルス ベスト8 木元・岩満
女子シングルス ベスト32 舟橋、ベスト64 伊藤
女子ダブルス ベスト16 舟橋・伊藤
男子団体戦(第4シード)
1回戦 5-0熊谷、2回戦 4-1伊奈学園、3回戦5-0城北埼玉
4回戦 3-2昌平(S1木元6-3平野、D1照井・金子6-4小暮・岩本、S2相原4-6河野、D2岩満・阿部6-1野上・奈良、S3小川2-6大野)
リーグ戦1回戦
1-4浦和学院(S1木元6-0古賀、D1照井・金子1-6秀・斉藤、S2相原1-6岡、D2岩満・阿部4-6上野・山岸、S3小川1-6須藤)
リーグ戦2回戦
1-4立教新座(S1木元6-2佐藤、D1照井・金子0-6西崎・岩澤、S2相原1-6武田、D2岩満・阿部1-6浅野・北村、S3川口0-6山田)
女子団体戦 1回戦
2-3 久喜北陽

◆ ワンダーフォーゲル部

- ＊今年度は、部員16名(男14、女2)とともに月1回のミーティングと定例山行を行っています。
＊今年度実施した山行は、次の通りです。
4／19 定例1回 御嶽山
5／10 定例2回 長瀨アルプス・宝登山
6／7 定例3回 三峰神社
7／12 定例4回 城山・熊倉山
9／21 定例5回 大高取山
11／3 定例6回 笠山・堂平山



勝ち進むことの価値

陸上競技部顧問 田 邊 潤

4X100mリレーで勝ったチームが「最速のチーム」と呼ばれるのに対し、1人400mの距離を4人でつなぐ4X400mリレー、通称「マイルリレー」の優勝チームには「最強のチーム」の称号が与えられる。2013年に先輩たちが果たした4X100mリレーでのインターハイ準決勝進出の偉業。当時1年生でその感激を共有した現3年生達は、先輩たちを超えようとマイルリレーでの全国制覇を目標に努力を重ねた。陸上競技部としてのこの究極の目標を目指し、マイルリレーチームは昨秋の県新人大会で優勝。個人の400mでも鈴木颯人(3G)と主将の宮川智安(3C)が秋と春に優勝。2人の県チャンピオンを軸に、皆力を大きく伸ばしていったが、故障者も出てリレーで勝ち進むことは容易ではなかった。そんな中、ピンチの時には必ず救世主が現れた。東和志(3C)岩崎直哉(3E)佐藤匠(3F)関将吾(3H)岡部裕人(2C)…。エース2人が不調の時でも選手達は力を合わせてピンチを乗り越え、県大会、北関東大会を勝ち抜き3年連続のインターハイ出場権をつかんだ。そんなヒーローたちが育ったのは、チームを支えてくれた人たちのおかげだった。全国制覇を誓い加藤誠也(2C)が描いた大きなダルマの色紙には卒業生を含め部員全員が願いを込めて署名した。マネージャーの落合千紘(3G)は試合ごとに部員達からの応援メッセージ冊子を作り選手に愛情を注ぎ続けた。保護者の方々の大声援、写真やビデオ

◆陸上部

- ＊県新人陸上競技大会 北部地区予選会 9月12～13日(熊谷文化スポーツ公園)
男 子
400m 5位 山本 飛(2C) 8位 関 宏太(1F)
1500m 6位 守安剛崇(2A)
5000m 4位 石川裕貴(2F) 5位 狩野佑介(1E)
110H 2位 加藤誠也(2B)
400H 3位 神谷 衛(2G) 4位 松久保大智(1B)
4X400mR 5位 早大本庄 関 宏太(1F)加藤誠也(2B)足立智紀(2D)山本 飛(2C)
走り幅跳び 5位 加藤誠也(2B)
女 子
100m 7位 田島春瑠乃(2D)
800m 優勝 宮島瑞生(2G)
1500m 2位 宮島瑞生(2G) 6位 江幡咲希(2A)
3000m 4位 玉手萌衣(2H) 6位 江幡咲希(2A)
4X400mR 4位 早大本庄 田中 花梨(2G)田島春瑠乃(2D)加藤友子(1H)森はるか(2C)
走り高跳び 2位 森はるか(2C)
槍投げ 3位 小栗円香(2E)
＊埼玉県新人陸上競技大会 9月22～24日(熊谷文化スポーツ公園)
男子 110H 3位 加藤誠也(2B)
走り幅跳び 7位 加藤誠也(2B)
女子 800m 3位 宮島瑞生(2G) 加藤君
宮島さんは 関東選抜陸上競技大会出場
1500m 7位 宮島瑞生(2G)
槍投げ 5位 小栗円香(2E)
走り高跳び 8位 森はるか(2C)
＊加藤君 宮島さんは 10月24、15日に群馬県前橋市でおこなわれた関東選抜陸上競技大会に出場しました
＊埼玉県高校駅伝 11月5日(熊谷文化スポーツ公園)
男子 22位
石川裕貴(2F) 守安剛崇(2A) 狩野佑介(1E)佐藤光(3E)久保大輝(3C)伊藤諒(3H)東和志(3C)
女子12位
本間結友果(3A)宮島瑞生(2G) 6位 江幡咲希(2A)齋藤夏生(2D)玉手萌衣(2H)

◆ ラグビー部

- ＊国体県大会
1回戦 5月30日(土) 川口北 26-7 早大本庄
順位戦 6月6日(土) 合同A 38-12 早大本庄
第2回全国高等学校7人制ラグビーフットボール大会埼玉県予選予選リーグ(Gブロック) 6月20日(土)

	浦和工業	早大本庄	西武文理
浦和工業		○21-17	●19-24
早大本庄	●17-21		○33-14
西武文理	○24-19	●14-33	

1位:早大本庄(+15) 2位:浦和工業(-1) 3位:西武文理(-14)
(順位は総獲得失点差による)
決勝トーナメント 6月21日(日)
1回戦 熊谷工業 29-7 早大本庄
第95回全国高等学校ラグビーフットボール大会埼玉県予選
1回戦 9月13日(日) 早大本庄 31-7 狹山工業
2回戦 9月26日(土) 早大本庄 5-5 春日部
(抽選により早大本庄が3回戦進出)
3回戦 10月12日(月・祝) 浦和 50-5 早大本庄

- ＊冬の新人戦、春の関東大会予選とともにベスト8入りし、幸先の良いスタートを切った高橋組でしたが、その後の国体予選では勢いに乗れぬまま連敗を喫し、全国大会予選のシードも取り損ないました。その反省を活かし、その後の練習ではより実践的なメニューを増やし、戦術の絞り込みも行って9月の全国大会予選に備えました。最後は、結果的に準優勝を飾った浦和高校に負けてベスト8進出はなりませんでした。怪我でサポートにまわった選手、マネージャーさんも含めて、ノーサイドの笛が鳴るまで死力を尽くして戦った部員達を誇りたいと思います。3年生諸君はこの経験を今後の人生の糧として下さい。12月下旬からは田所賢汰君(2G)率いる新チームの新人戦が始まります。あらためて応援よろしくお願いします!それから、ワールドカップを観て「ラグビーっていいなあ」と感じた人、ラグビーを始めるなら今です!!1年生、2年生問わず是非グラウンドへ見学に来て下さい!!!

◆11th International Intelligent Ironman Creativity Contest 2015(7月24日～31日)

今年度は11回の歴史で初めてとなる台湾東部海岸台東市国立台東大学を会場として開催されました。参加国は台湾・ドイツ・香港・シンガポール・ネパール・日本です。本校からは3年高山千恵・尾林舞香・市川なつみ・田口瑛美・2年菊地環・飛知和志帆が参加しました。パフォーマンス部門人気投票では1位を獲得しましたが、最終課題では入賞できませんでした。



◆囲碁将棋部(囲碁)

- ＊全国高等学校囲碁選手権 7月26日、27日 日本棋院
女子個人戦 七位 3A 齊木 果穂
＊全国高等学校総合文化祭 7月30日、31日 滋賀県長浜市
団体戦 優勝 3A 齊木 果穂
埼玉県として全国大会初優勝、本学院でも初優勝です。

◆囲碁将棋部(将棋)

- ＊高等学校将棋王位戦埼玉県大会 9月27日 七位 1D 江口 幸寛
埼玉県高校将棋王将戦大会兼全国高校文化連盟将棋新人戦埼玉県予選 11月1日 県民総合活動センター 男子A級 優勝 1D 江口 幸寛
六位 2A 露峰 航史郎
江口君は1月28日～30日に熊本市阿蘇町で行われる全国高校文化連盟将棋新人戦に出場することになりました。

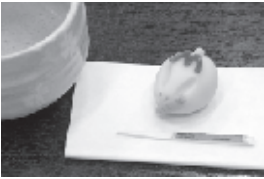
◆美術部

- ＊今年度は部員12名(男4、女8)で、デッサン、油絵、陶芸、イラストなどの制作を中心に活動しています。
5月31日は、毎年の恒例となっている美術館(今年度は国立西洋美術館)と画材屋(今年度は世界堂)へ見学に行きました。
7月29～31日は、合宿を実施しました。合宿期間中は、宿泊先の軽井沢セミナーハウスや軽井沢市内の屋外で絵画制作を行いました。
10月24～25日の稲稜祭では、それまでに制作した絵画や陶芸などの作品展示および物品の販売を行いました。販売した物は、生徒が手作りの缶バッジと皮製プレスレットです。お蔭さまで完売し、利益を上げることが出来ました。
＊今年度から美術科の教員が顧問ではありませんが、コーチの方々のご協力もあって、文化祭を成功させることが出来ました。



◆茶道部

- ＊茶道部は週2回活動しており、また稲稜祭や国際交流の場でお茶会を開催しております。2014年から、部員たちのお稽古の場を増やすこと、皆様に茶道を知っていただくことを目的として、呈茶の席「坐来席」を随時設けることといたしました。呈茶とはお茶会ほど格式が高くない気楽に立ち寄れるお茶の場のことです。お気軽にお寄りください。
＊坐来席 5月27日、7月11日、9月26日
＊国際交流歓迎お茶会
＊5月26日台中一中歓迎呈茶、8月24日the East Asian Game Theory Conference 2015歓迎お茶会、10月30日NIC歓迎お茶会
＊定例お茶会
4月25日新歓お茶会、7月8日七夕お茶会、10月24日25日稲稜祭、12月12日クリスマスお茶会、1月17日お初釜、2月7日卒業お茶会
＊Topics
＊梅林堂さんのご協力により第2代目オリジナルお菓子「わせだうさぎ」ができました。3G 勝又 絵里佳のデザインです。
＊藤田小学校で5・6年生総合学習を受け持ちます(2月3日「茶道講座」)



撮影も貴重な資料となった。高柿・田中トレーナー、内野・飯田コーチ、矢野先生・・・、多くの方々チーム一丸となり選手たちを陰で支えてくれた。このチームにかかわるすべての人たちの情熱が、選手達の背中を押し、たどりついた和歌山でのインターハイ。予選レースは3分14秒88のチーム新記録で通過したが、翌日の準決勝はレース途中、混戦の中バトンを落とし最下位という厳しい結果となり、決勝進出



の夢はあと一步のところで潰えた。インターハイを勝ち抜くために青春のすべてをかけた3年生たちの熱い思いは、レース後の涙となった。「決勝に進めず残念です。遠くまで応援に来てくれたみんなに申し訳ない。頑張って練習してきたつもりだったが俺達にはまだ何かが足りなかった…」レース後の集まりで選手達が声を震わせて言った最後の言葉は、謙虚で純粋なもので私たちの心に響いた。厳しい勝負を常に紙一重で勝ち抜いてきた彼らを批判する人など誰もいない。「たくさんの感動をありがとう!」今改めて、このチームと共にいられたことに感謝したい。そして、後輩たちが先輩を超えることを信じて、新たな戦いに臨んでゆきたいと思う。